

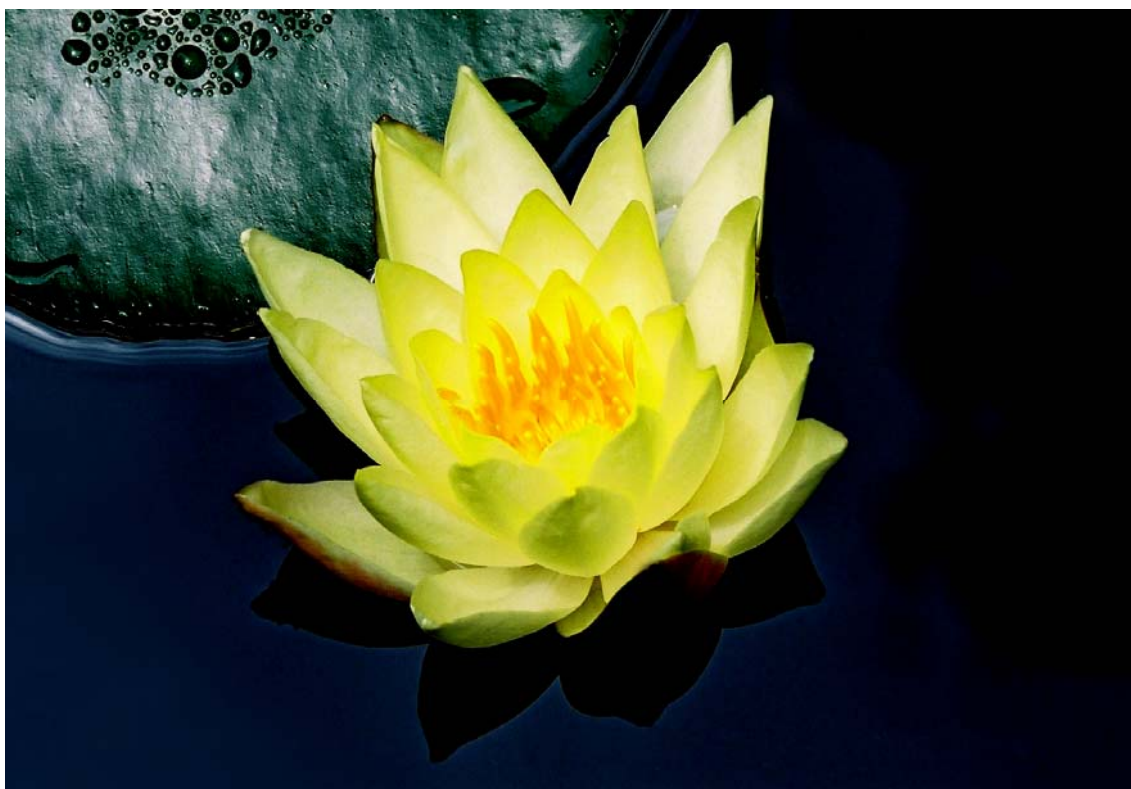
## 12) スイレン／ヒツジグサ／コウホネ＝睡蓮／未草／河骨

スイレンは温帯から熱帯に広く自生するスイレン科の水性多年草で、世界には約40種が分布する。温帯性のスイレンは耐寒性も強く、赤、白、黄色、ピンクなどの花を咲かせ、日本にはヒツジグサ1種が分布する。熱帯性のスイレンは一般的に温帯種よりも大型の花を咲かせ、また花色も豊富で夜開性のものや芳香のあるものなど種々がある。学名は『*Nymphaea*』で、属名は水の女神を意味する古い植物名に由来する。イギリスでは『water lily』、中国では『睡蓮』である。

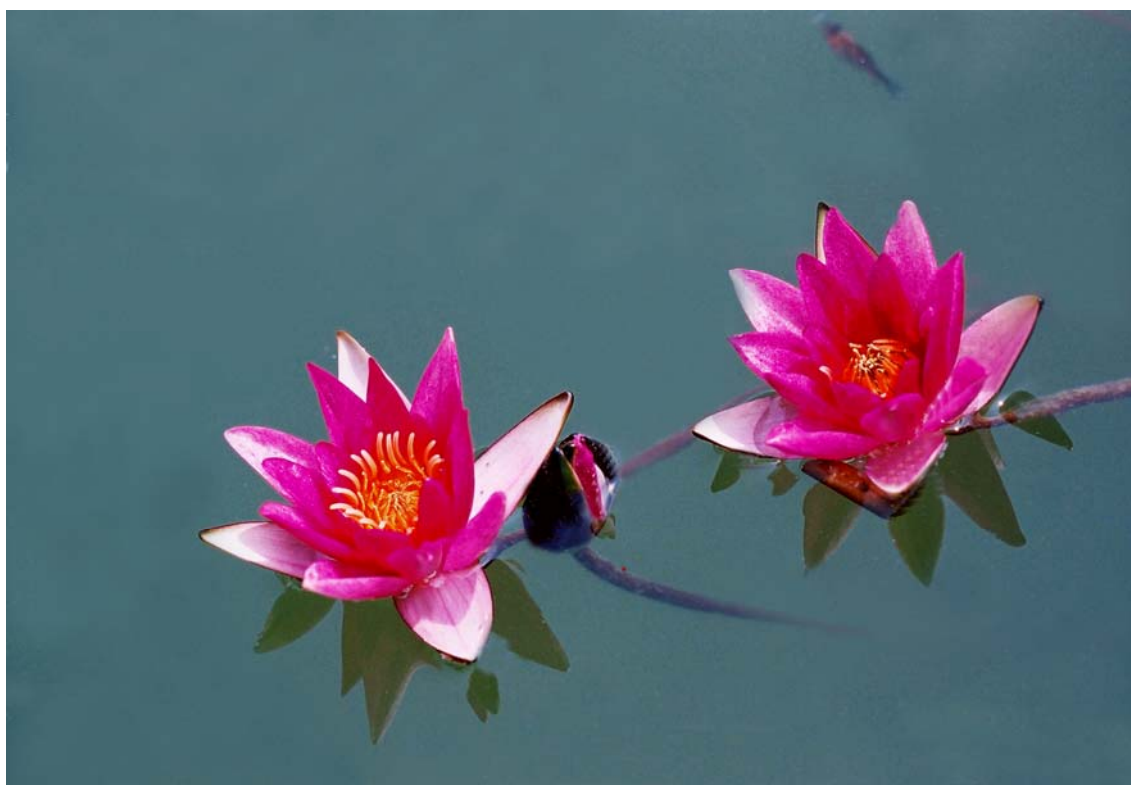
鑑賞用のスイレンが日本に伝来したのは明治になってからのことで、花の美しさから急速に広まった。古代エジプトではナイル側の川面に咲くスイレンは神聖な花とされ、壁画や彫刻、建築の題材などにもされた。古代エジプトで復活のシンボルとされたオシリス神は、睡蓮の花冠をかぶり、第19王朝のラムセス2世(在位1250BC～1235BC)の棺には、長さ50cmの花茎がついた青い睡蓮の花と、花冠や花輪に使われた白い睡蓮が副葬されていた。この青い睡蓮は第4王朝(2600BC～2450BC)の神への捧げ物の中にも描かれ、また女性は睡蓮の花を手にして宴席に臨んだことなどから、この時代の睡蓮は特別な意味のある花であったことがうかがえる。

ヒツジグサはスイレン科の多年性水草で、日本に野生する唯一のスイレンとして、各地の池塘や湖沼、小川にも分布する。葉は楕円形で基部は深く切れ込み、泥中の根茎から出て水面に浮かび、夏、径3～5cmの白い花を開く。和名の由来は未の刻(午後2時ごろ)に花を開くためといわれているが、実際には午前中に開花する。花が終わると花柄は水没して液果を結び、完熟すると崩れて多数の種子を放出し、これは後述するコウホネも同様である。別称としてはスイレン、ナナツバナ、ベゴノシタ、カッパノゴキなどがある。学名は『*Nymphaea tetragona*』で、属名は前述の通りで、種小辞は「四角の」という意味で、中国名は「子午蓮」である。

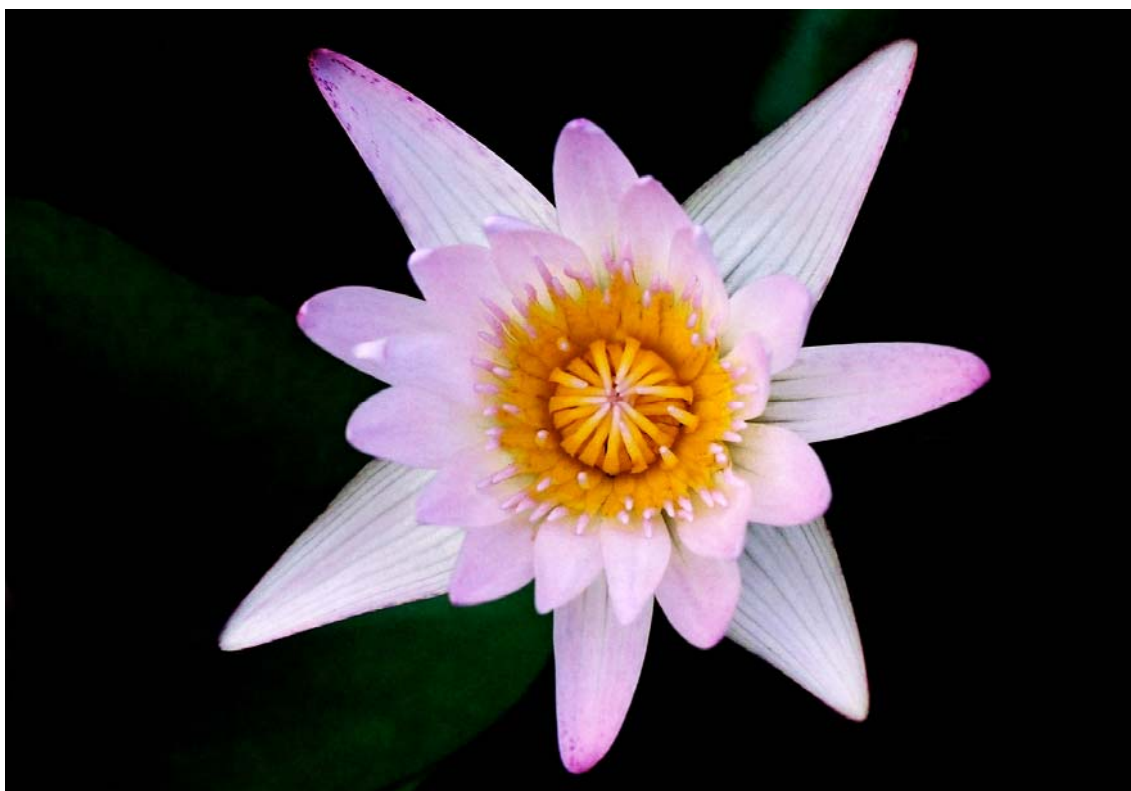
コウホネはスイレン科の多年草で、北海道西南部から九州まで日本各地の池沼や小川などに生える。根茎は肥大して泥土中を横に這い、先端から長さ20～30cmの卵状で長楕円形の葉を出す。葉には長い葉柄があり、基部はヘラ型となっている。花は6～9月にかけて、水面より高く花柄を出して、径5cmほどの鮮黄色の花を茎頂に1輪、上向きにつける。5枚の花弁に見えるのは実は萼片で、花弁はその中に多数あり、長方形をしている。和名の由来は河骨のつまったもので、白骨のような根茎の形状に由来する。別称としてもカワホネ、カドー、富山県ではカタスポなどとも呼ばれており、アイヌはカバトと呼んでいた。学名は『*Nuphar japonicum*』で、属名はアラビア語の植物名に由来する。イギリスでは「yellow pond lily」、中国では「骨蓬」である。太い地下茎は食用になり薄切りして茹でて水に晒し、炒め物、煮物、揚げもの、佃煮などにする。この根茎中にはアルカロイドを含み、漢方では『川骨』と呼び、煎じて強壯、止血、健胃、月経不順などに用いる。



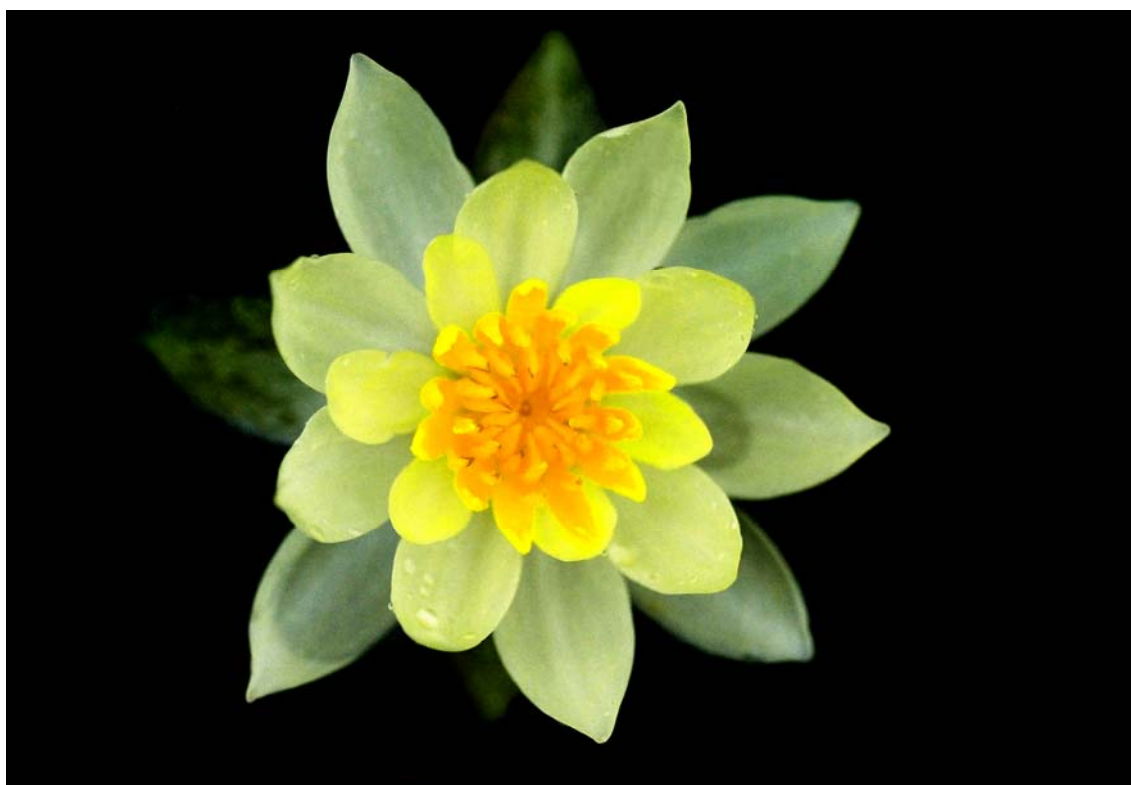
温帯性のスイレンは 19 世紀末ごろ、フランスの園芸家ラトゥール・マーリヤックによって盛んに品種改良され、明治から大正時代に日本に入ってきた(東京都明治神宮)。



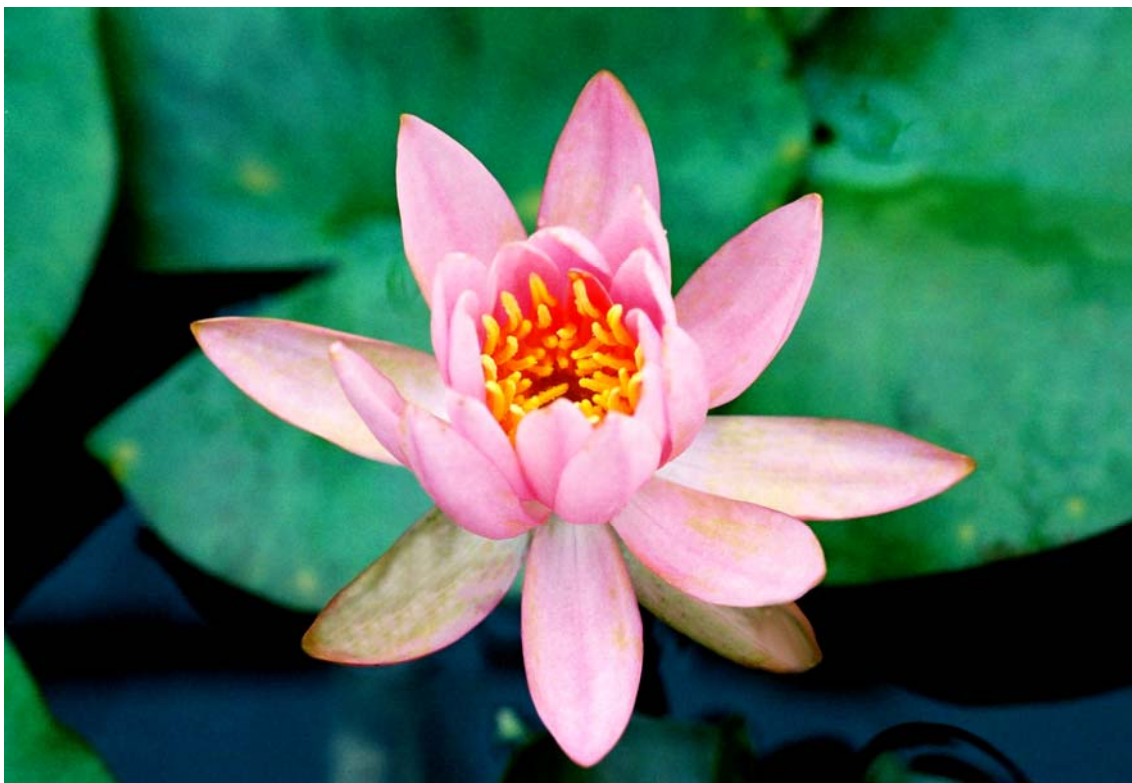
温帯性水練はモネの絵の中にも登場する。ラトゥール・マーリヤックの作出したものだろう。



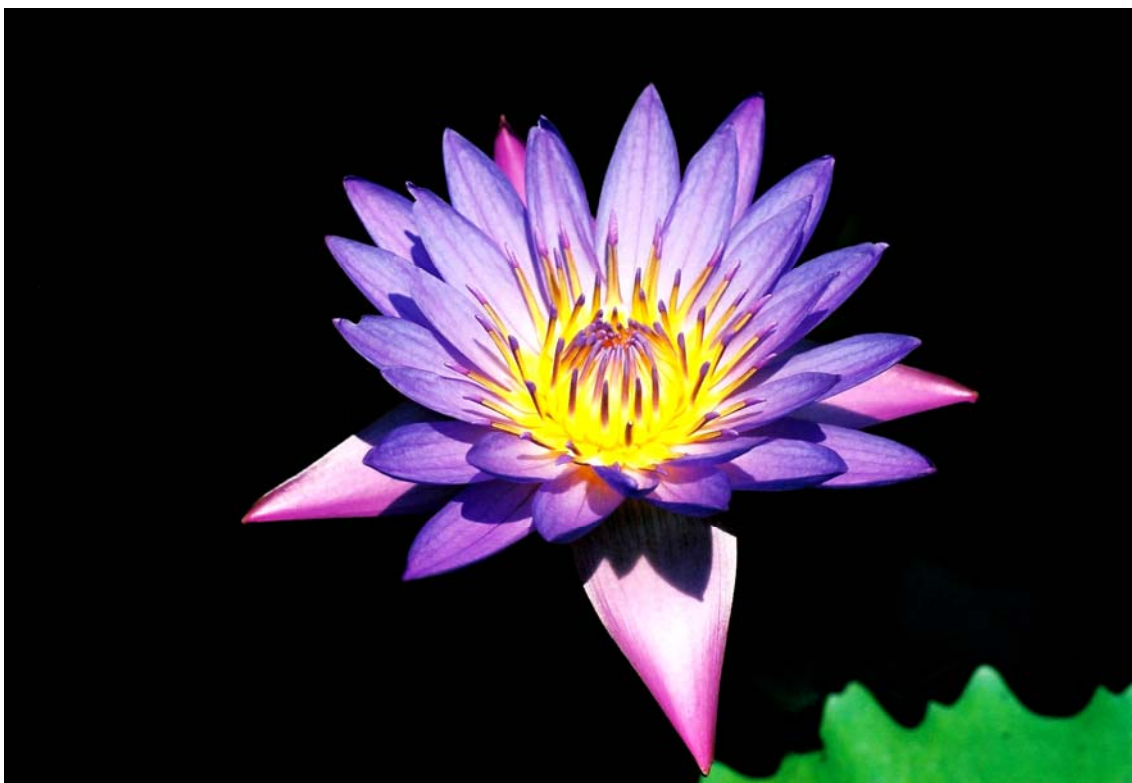
熱帯性の睡蓮は東南アジア、アフリカ、中央アメリカなどを原産とするもので、1920年頃からアメリカを中心にして、新品種の開発が進められるようになった(東京都新宿御苑)。



熱帯性睡蓮は鮮やかな花を咲かせるものが多く、水温40度ぐらいでも耐える(東京都新宿御苑)。

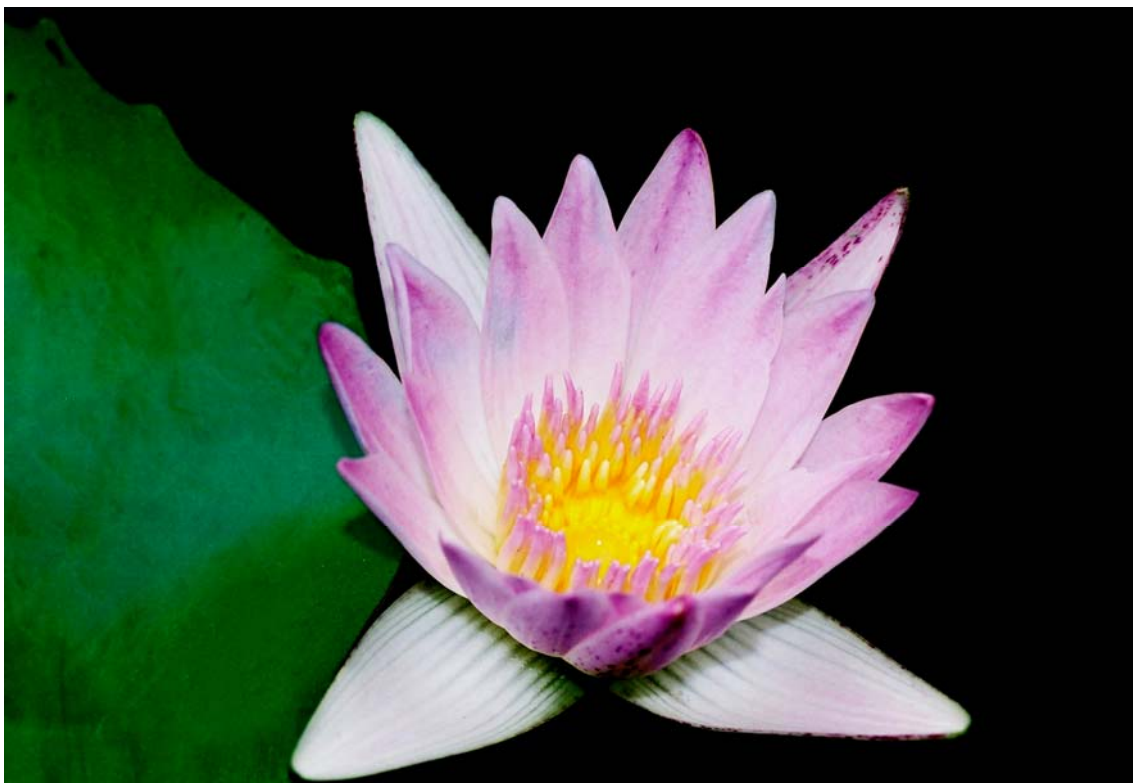


熱帯性の睡蓮には昼咲種のほかに、夜咲種がある。また温度の管理さえ十分であれば、年中花を咲かせることが出来る。多種類あり、花色も花形もすこぶる多い(東京都新宿御苑)。

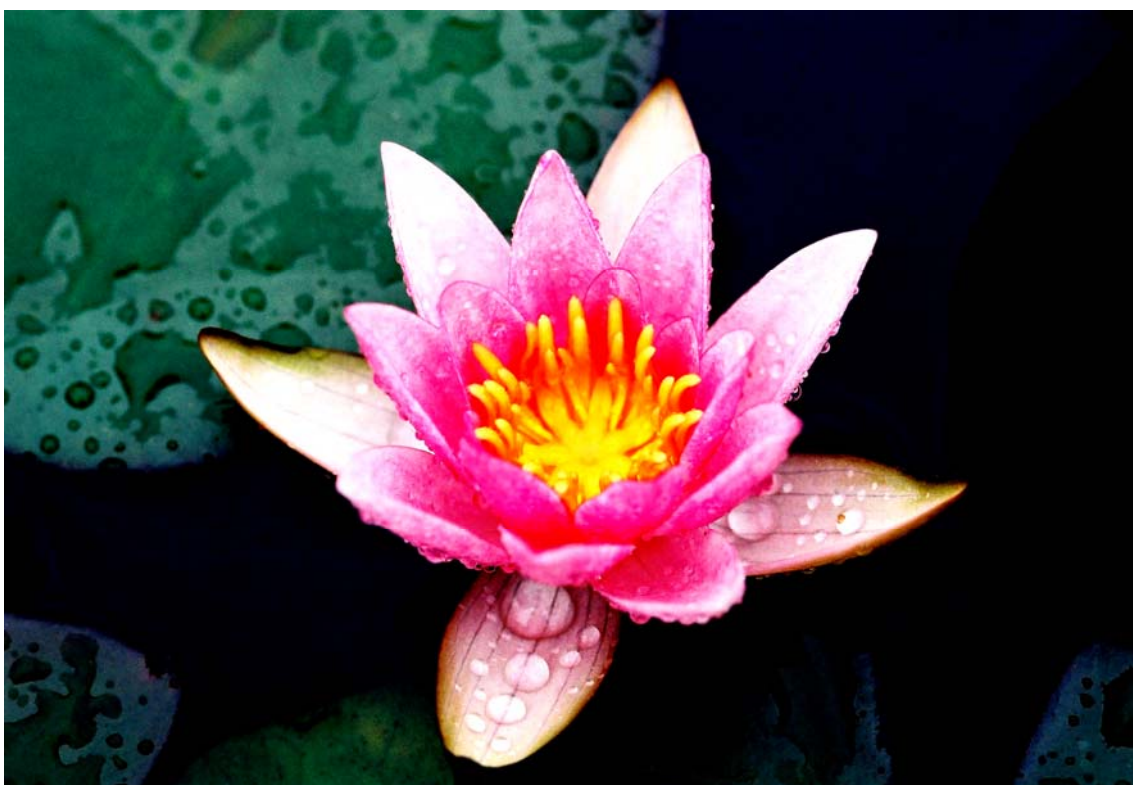


熱帯性の睡蓮は花付がよく、小さな水盤でもよく花を咲かせる(東京都新宿御苑)。

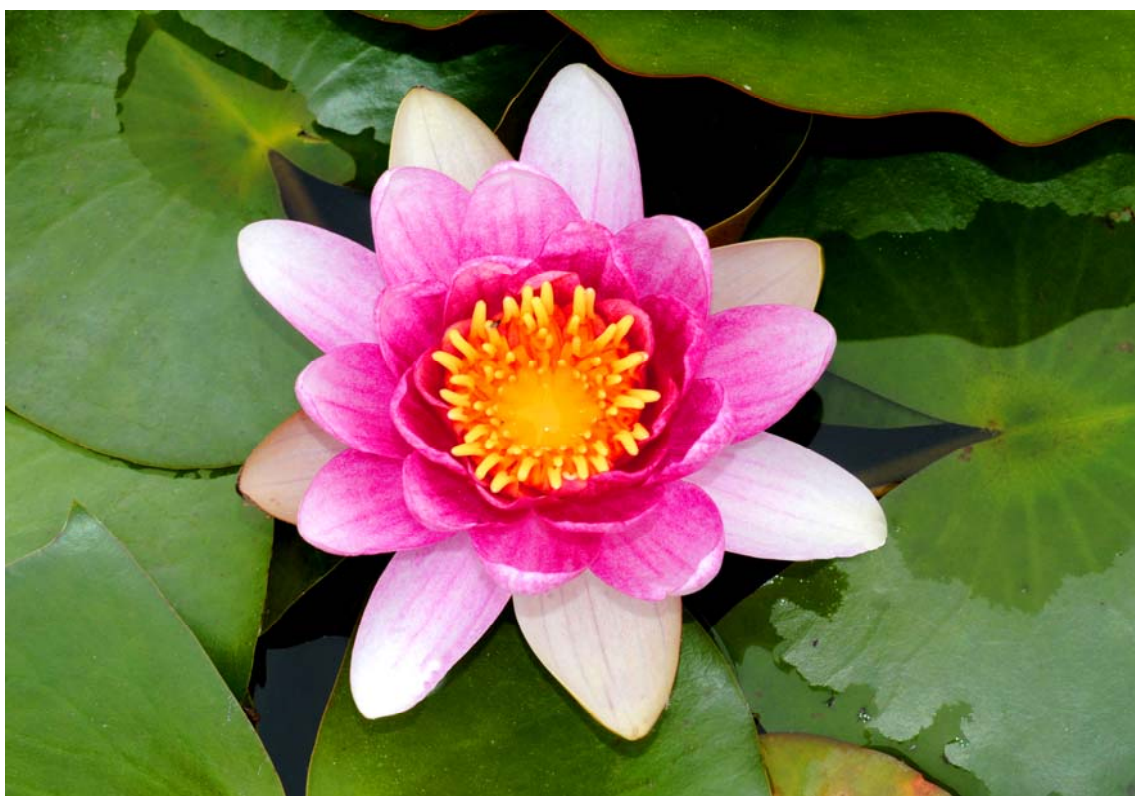




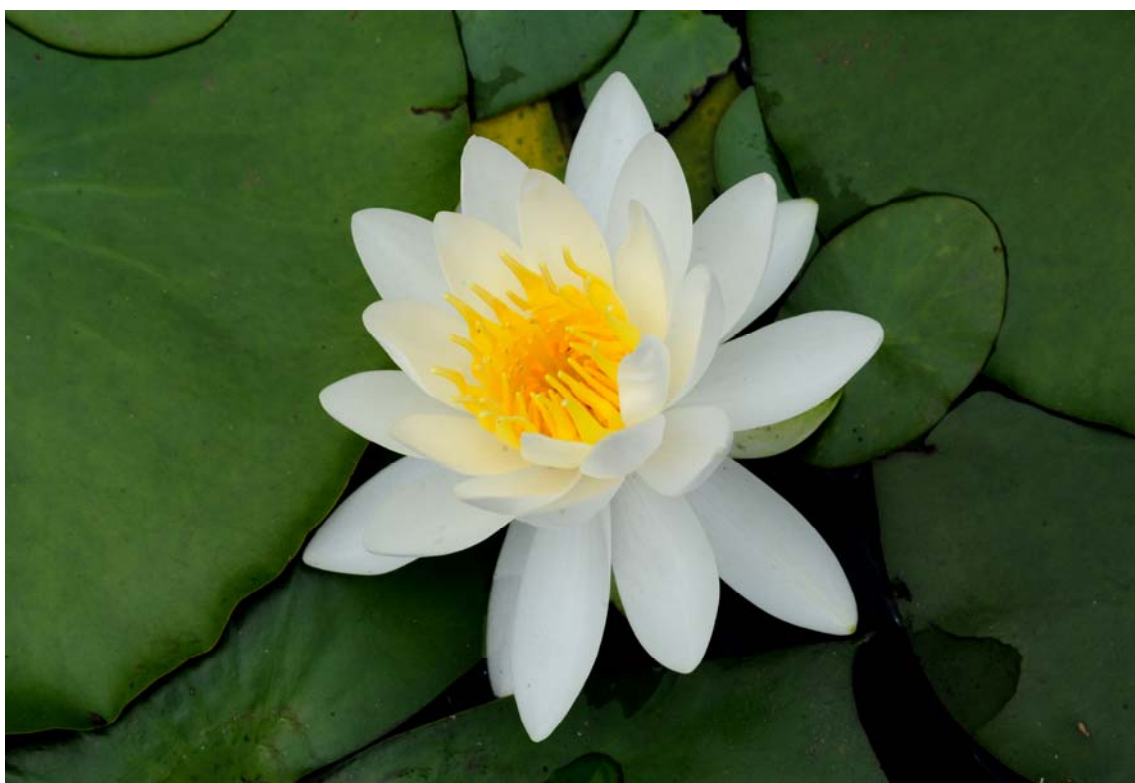
熱帯性睡蓮の栽培は意外に簡単で、晩秋から初冬にかけて、根茎を掘り上げてから、赤玉土を粘土状にこねて根を包み、ビニール袋に入れて水分を保ち、室内で保管するだけでよい。



温帯性の睡蓮(東京都新宿御苑)。

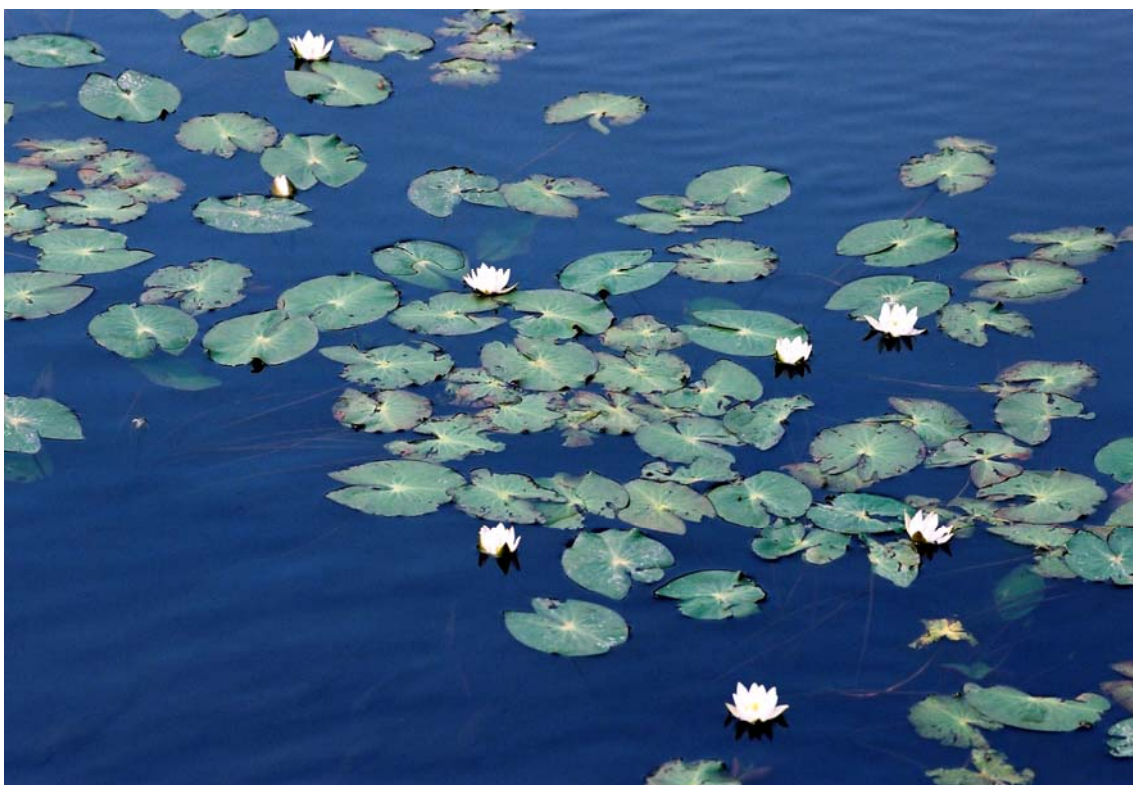


温帯睡蓮の中では最もポピュラーな「アトラクション」の花。栽培するのも容易で、陽当たりさえ良ければ毎年良く花を咲かせてくれる。根元に魚の干物などを与えればさらに良い。

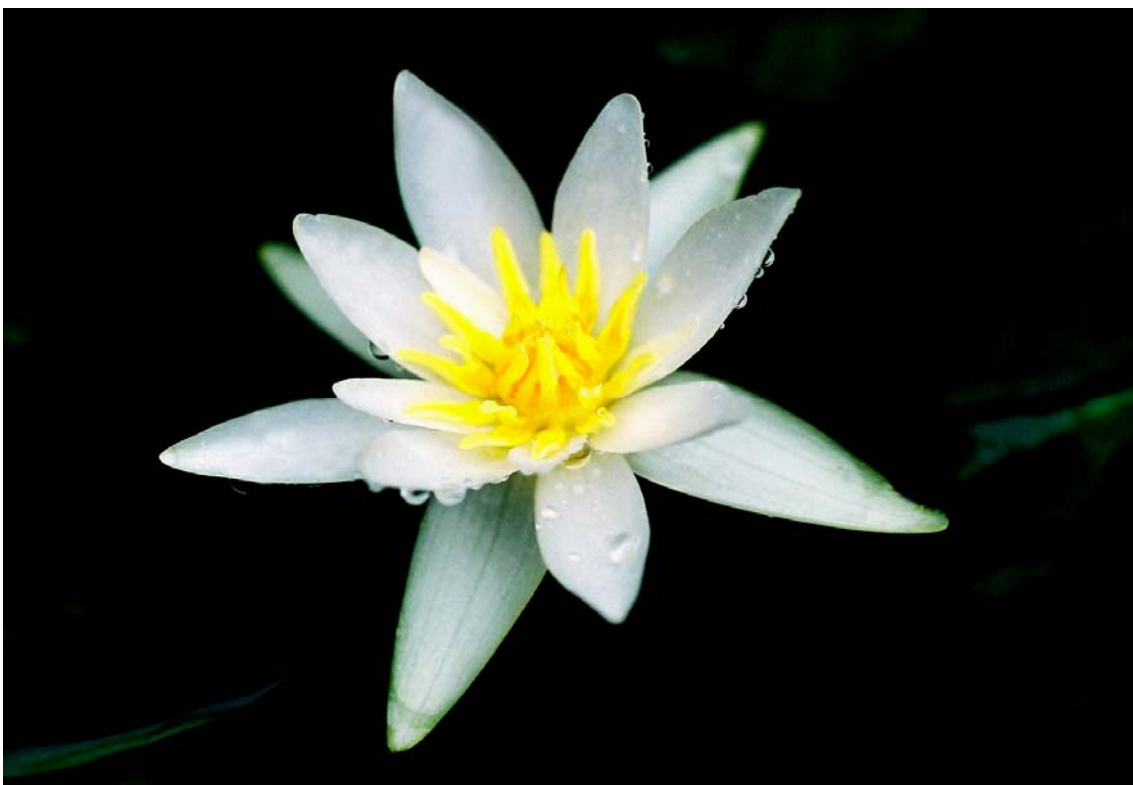


温帯性の睡蓮、白花は比較的珍しく、夏はひときわ涼しげである(さいたま市緑区)。





ヒツジグサは日本では唯一の野生種睡蓮である。未の刻(午後2時)に花を咲かせるから未草と言うのは俗説で、実際には朝開き夕刻まで咲いている(神奈川県箱根町湿性花園)。

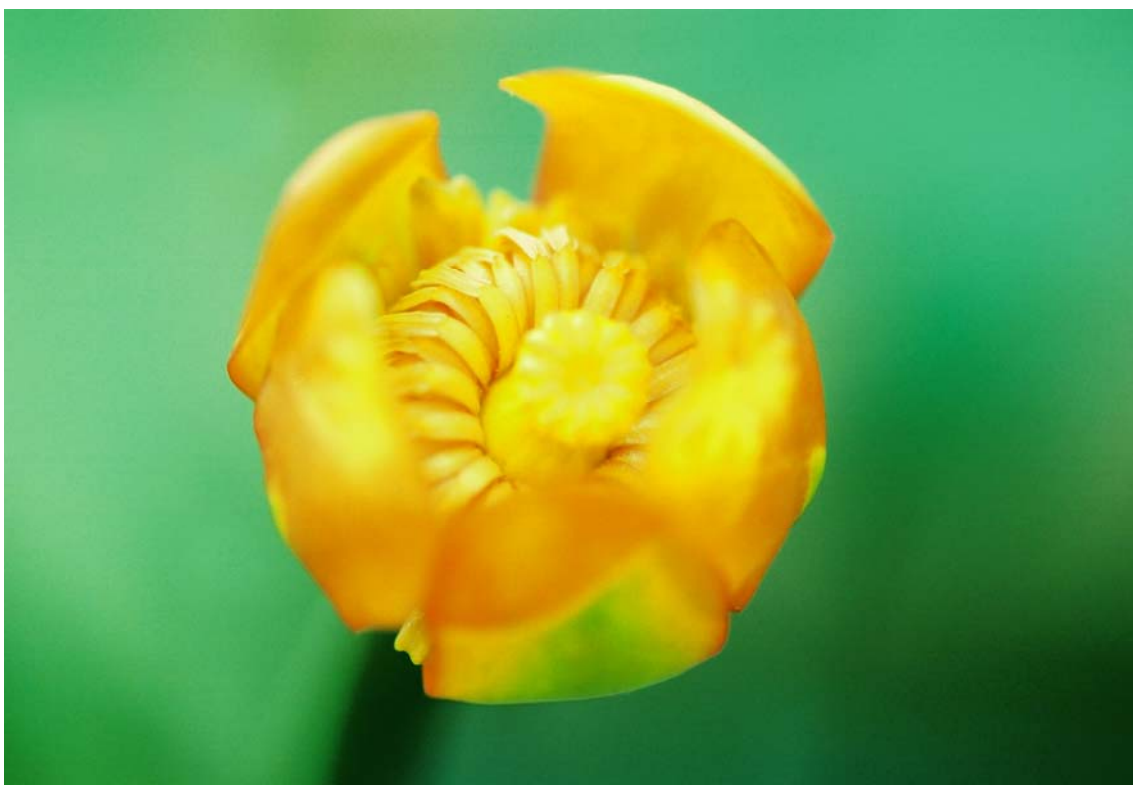


ヒツジグサは寒さに強く高原地帯の湖沼にも自生する(神奈川県箱根町湿性花園)。

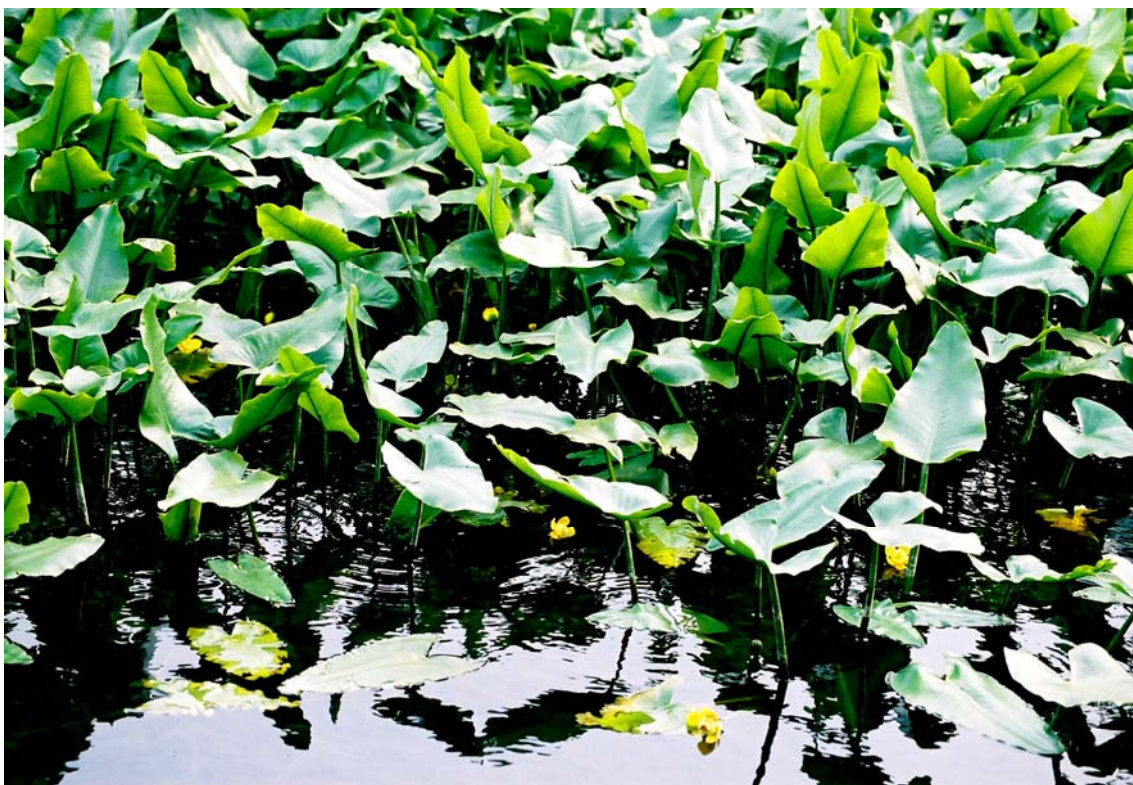


独特の花形で、この濃い黄色は自らの存在を強烈に主張しているようである(さいたま市緑区)。





コウホネの花弁に見えるのは萼片で、その内側にコイル状に見えるのが花弁である。浅い池に多く、流れのゆるい川にも生えることがある(神奈川県箱根町湿性花園)。



コウホネは暖かくなると水上に葉を出すようになる(神奈川県箱根町湿性花園)。

[目次に戻る](#)